

「研究ノート」

学習支援用日英例文パラレルコーパス SCoRE の構築における課題—日本語対訳例文の訳出に焦点を当てて

若松 弘子・石井 卓巳・中條 清美

Abstract

The Sentence Corpus of Remedial English (SCoRE) is a collection of level-appropriate example sentences which was created to provide freely accessible grammatically categorized materials for effective data-driven learning in Japanese EFL classrooms. To benefit the target population, the example sentences were prepared by native speakers of English who included most relevant grammatical items and verified appropriate vocabulary level and sentence length. Each example sentence has a Japanese translation so that students are able to focus on grammatical structure and do not struggle with meaning. The English to Japanese translation initially aimed at realizing an easily-read direct equivalent; however, this occasionally proved to be challenging because of the contrastive differences between English and Japanese (e.g., cognitive semantic and structural features). For instance, *come* and *go*, when used as verbs of motion, are not always semantically equivalent between English and Japanese. In addition, the meaning of *you* in English represents *what you say*, as in *I understand you*, but this does not hold in Japanese. In this paper, these types of examples are presented and discussed.

1. はじめに

学習者に言語使用の用例を提示し、言語の規則性やパターンなどを探らせる指導法は、80年代半ば、実践者である Tim Johns によってデータ駆動型学習 (data-driven learning: DDL) と名付けられて注目を浴び (Johns, 1991)、以降、教育現場での DDL の普及やその効果が期待されてきた。それから30年ほど経った現在、日本の教育現場における DDL は当初の期待ほどに普及しているとは言い難い。その理由として、日本の英語学習者の大半にとって、既存のコーパスに含まれる英文の難易度が高すぎる事が挙げられる。効果的な語学学習には学習者のレベ

ルに合致した教材が必要である。しかし、例えば、一般的な英語の総体として広範囲からバランスよくデータを集めた British National Corpus に含まれる英文を、学習者が一読して理解することは容易でないことが多く、その英文のコンコーダンスラインから規則性を読み取るには困難が予想される (e.g., Allan, 2009)。Chujo, Utiyama, and Nishigaki (2007) が指摘するように、教育利用を想定し、著作権の問題をクリアした入手しやすいデータで構成されたコーパスは不在といえよう。

適切に行われた DDL は語彙や文法知識の習得を促すという点で高い効果を発揮することが示されている (Cobb & Boulton, 2015)。DDL ではコンコーダンスを用いて学習対象の語や句が検索され、それらが使われている実際の使用例が複数提示される。学習者はそれらの複数の使用例を一挙に観察し、文法規則や語彙の意味・用法を「発見」する。DDL は学習者自身を中心となる指導法であり、学習者の気づきと自律的な学習を促し、高い動機づけが行われることを長所に持つといえよう。

日本の教育現場において DDL を効果的に行うために開発されたのが日英例文パラレルコーパス (Sentence Corpus of Remedial English: SCoRE) と名付けた例文データベースである (Chujo, Oghigian, & Akasegawa, 2015)。¹ SCoRE は簡潔で自然な英文とその対訳を集積しており、学習者に適切なレベルの例文を提供し、利用者が多様な教育目的に活用できることを目指している。本稿では、最初に SCoRE を概観し、その後、本稿の主目的である SCoRE 構築に際しての日本語対訳作成の基本方針と、その日本語対訳の付与において困難とされた事例を報告する。加えて、日本語例文訳出の際にいくつかの要因に起因して適切でないと判断され、修正もしくは除外した英語例文について説明する。最後に、SCoRE 利用に際し留意すべき点について述べる。

2. 日英例文パラレルコーパス SCoRE の概要

教育実践に利用しやすい日英例文パラレルコーパス SCoRE は、現在、暫定版がウェブ上で公開されている (<http://score.lagoinst.info/>)。図 1 に示すような画面から、著作権フリーの例文を文法項目別に、日本語訳とともにダウンロードできる。図中の数字は文法パターン別、キーワード別の例文の数を示す。

The screenshot displays the GPPS with SCoRE interface. On the left, a sidebar shows a tree view of grammar categories under '文法/パターン'. The '不定詞' (Infinitive) category is expanded, showing '動詞 + 不定詞' (312) and '名詞 + 不定詞' (280). The main area is divided into three panels:

- 動詞 + 不定詞 (Verb + Infinitive):** A list of verbs with their frequency counts: want (30), begin (27), try (28), start (29), like (26), need (29), learn (25), forget (29), plan (32), love (29), hope (28).
- want:** A list of example sentences for the verb 'want':
 - I want to sleep. 私は寝たいです。
 - Do you want to go? あなたは行きたいですか？
 - He wants to eat soon. 彼はすぐに食べたいです。
 - I want to visit Kyoto. 私は京都を訪れたいです。
 - I want to see the cherry blossoms. 私は桜の花が見たいです。
 - I want to eat sushi. 私は寿司を食べたいです。
 - She wants to play cards. 彼女はトランプをしたいです。
 - They want to go home. 彼らは家に帰りたいです。
 - I want to see a movie. 私は映画を見たいです。
 - Do you want to read this book? あなたはこの本を読みたいですか？

At the bottom, it indicates '11 キーワード' and '合計: 312'. The footer contains the copyright information: 'GPPS with SCoRE Copyright © 2014-2015 College of Industrial Technology, Nihon University. All rights reserved.'

図1 日英例文パラレルコーパス SCoRE の *want to* の画面

SCoREの主要な利用者はリメディアルレベルの大学生、つまり、TOEIC300点以下あるいはCommon European Framework of Reference for Languages (CEFR)のおおよそA1, A2レベルに該当する²学習者と彼らを指導する教師である。図1に示すような不定詞や所有格などの文法項目について、*want*, *begin*, *try*など動詞ごとに初級、中級、上級合わせて約30文前後の例文が利用可能であるため、実際に公開してみると、中学、高校の教師にも教育支援教材として好評であったと報告されている(西垣・小山・神谷・中條, 2014)。

SCoREを構築する手順としては、最初に、中條・西垣・山保・天野(2011)、中條・西垣・山保・落合(2012)の基礎研究に基づいてSCoREの対象学習者に適した英文テキストレベルの調査が行われ、それらと同等レベルのやさしい英語から成る3,000万語のソースコーパスが、米国Reading教科書(e.g., *Houghton Mifflin Reading*), 多読用教材(e.g., *Oxford Reading Tree*), アジア諸国の中・高英語教科書(e.g., 『国民中學英語課本 English』), 子供向けのウェブニュース記事(e.g., *Teaching Kids News*)等を集積して作成された(Chujo et al., 2015)。

続いて、SCoREの対象学習者が苦手とする文法項目の調査が行われ(中條・横田・長谷川・西垣, 2012), それらの不得意文法項目に対応する高頻度動詞などのキーワードがソースコーパスから抽出された。例えば、仮定法過去のキー

ワードは *were, went, wanted, knew, got, came* などであり、関係詞を含むキーフレーズは *a person who, a man who, someone who, a thing that* などであった。

次に、ソースコーパスから抽出された不得意文法項目を含む英語例文を検討したところ、学習者に適切なレベルの英文になっているとはいえ、文が長すぎたり、内容が教育的に適さないものや、文化的差異から注釈が必要となるものが多く含まれていたりすることが判明した。また、ソースコーパスを構成する言語資料のほとんどは著作権が付与されており、そのまま公開して教育実践で使用することは不可能であった。

よって、SCoRE に含める英語例文は、英語教育の実践経験を有する英語母語話者が、ソースコーパスに含まれる英文を情報源にしつつ、*Corpus of Contemporary American English* 等を確認しながらオリジナルの例文を作成するという手順を踏んだ。SCoRE の例文は、初級、中級、上級の3段階のレベルに分けられている。習得・定着が難しい文法項目については学習者が初級レベルのやさしい文を利用して、文法規則により容易に気付くことができるように、また、学習者が既に理解している文法項目についてはより難易度の高い文にも挑戦できるように設計されている。例文のレベル分けには、Chujo et al. (2007) と中條他 (2011, 2012) でテキストの難易度の判断に有効であるとされた指標のうち「文長」と「米国の語彙習得学年」が用いられている。具体的には初級は8語以内の文で、かつ、語彙習得学年1年生から2年生の語彙で構成され、中級は5語から11語以内の文で、かつ、語彙習得学年1年生から3年生の語彙で構成され、上級は9語以上の文で4年生以上の語彙を含むことを基準とした。

最後に、作成された英語例文に日本語訳が付与された。その際、当該英語例文が学習支援の目的を有する SCoRE の例文として妥当であるかどうかの確認も行われた。これは以下の手順に従った。(1) 最初の訳出担当者が一回目の訳を作成する。(2) 二人目の担当者が学習支援用の訳として相応しいかどうかを鑑みながら、一回目の訳出を修正もしくは参照しつつ、二回目の訳を作成する。(3) コーディネーターが二回目の訳を確認する。(4) 二回目の担当者から「学習者用の英語例文としては英語が自然すぎて学校文法の範疇をこえる」等の懸念が提出された英文について、コーディネーターが、例文を作成した英語母語話者と協議を行う。その協議の結果次第で加筆修正、あるいは新規の例文作成を要請する。(5) 三人目の担当者が必要に応じて微修正を行い、三回目の訳出を行う。(6) コーディネーターを通して、二回目と三回目の訳出担当者により最終の確認と協議を行う。以上 (1) から (6) までの過程における日本語対訳作成の基本方針を次節

で述べる。

3. 学習支援のための日本語訳出方針と事例

SCoRE の英語例文に付与した日本語対訳の性質および訳出の方針について論ずるため、まず、翻訳の理論的枠組みからみた学習支援目的の日本語対訳の性質について説明する。³ 等価 (equivalence) は翻訳を定義する中心的な概念であり、原文の起点テキスト (source text: ST) と訳出された目標テキスト (target text: TT) の間に実現されるべきとされる。しかし、何をもって等価の実現とみなすかについては長らく議論の対象とされてきた (e.g., Kenny, 2009; Munday, 2008; Panou, 2013)。翻訳学の教科書的な存在である Baker の *In Other Words* (2011) では、語レベルでの等価、語レベルを超えた等価、文法的等価、主題と情報構造に関するテキスト等価、結束性に関するテキスト等価、語用論的等価が各章のトピックとなっており、一律的に等価を捉えられないことを示唆している。

Nida (1964) は翻訳理論の分野において、形式的等価 (formal equivalence) と動的等価 (dynamic equivalence) という二つの基本的志向性を表す用語を導入した。形式的等価とは、形式と内容の両方においてメッセージ自体に注意を集中したものであり、ST の様々な要素や構造が TT において一致するよう訳される。一方、動的等価とは、ST の受容者とメッセージの間に存在した関係が、TT の受容者とメッセージの関係と実質的に同一であるときに生じるものとされる。言い換えると、形式的等価は意味だけではなく形式にも即した逐語的な訳出方法であり、ST に重きが置かれている。一方、動的等価はより TT 側に寄り添い、メッセージの等価に焦点が当てられると理解できる。

Nida (1964) は形式的等価よりも動的等価の実現が「良い翻訳」に必要であると主張したが、この主張は日本の出版翻訳においても1970年代を境に「自然で」「読みやすい」日本語訳が推奨されてきたことに通じる (古野, 2002)。戦前戦後は学術分野を中心とした直訳調の読みにくい翻訳が中心であったが、今日、日本語として不自然な訳は非難されることが多く、動的等価の実現を重視する訳が小説翻訳などを中心に一般的であるといえよう。⁴ しかし、本稿で対象としている SCoRE 例文は文法パターンを明示的に提示することを目的に持つため、動的等価の実現を優先する訳は不適である。機能主義的に翻訳を捉えるアプローチ、すなわち、TT の言語形式はそれが果たすべき目的によって決定されるという考え方に則ると、SCoRE 例文の対訳の目的は学習支援である。そこで、SCoRE 例文

対訳の作成は、形式と意味内容の等価を目指すという Nida (1964) の形式的等価を追求し、ST の文法項目や構文を TT の文に明示的に反映することを基本方針とした。また、動的等価では発話の社会文化的状況などコンテキストが果たす役割が大きいですが、SCoRE 例文は一文で提示されるため、できるだけコンテキストに依存しない訳となるよう留意した。このため、人称代名詞 *I* は「私」、*you* は「あなた」と統一した。同時に、学習者の負担軽減のため、一読して理解可能な訳とすることも方針とした。

実際に SCoRE 例文を訳出してみると、どの程度の厳密さをもって形式的等価を実現できるか、また、どの程度読みやすさに配慮するかは、それぞれの例文が含有する語、構造、コンテキストなどによって異なった。以下では訳出において、語順などの構造の等価実現をしなかった例 (1) と (2)、語レベルにおいて等価実現しなかった例 (3)、(4)、(5) を紹介する。

(1) All visitors had their bags checked before they could enter the embassy. (すべての訪問者は、彼らがその大使館に入ることができるようになる前に、彼らのカバンを検査されました。) これは、ST と TT の間で、語の等価は実現されているものの、節の順番が一致しない例である。*their* を「彼らの」、*they* を「彼ら」と逐語に訳したために、日本語としての流暢さは損なわれたが、理解しやすい日本語訳となるように ST の *before* から始まる後半の節が、TT では主語の直後の位置に置かれた。

(2) Do you see that girl whose dog is white? (あなたは白い犬を連れたあの少女が見えますか?) これは構造が不一致の例である。関係代名詞 *whose* 以下が *girl* に係るように訳すと、「あなたは犬が白いあの少女のことが見えますか?」となる。しかし、「犬が白いあの少女」は不自然である。採用した訳からは英語例文中の関係代名詞が *whose* なのか *who* なのか判断できないという不利益はあるが、一読して理解しやすい日本語訳となることを優先した。

(3) We'll come to your house this time if you come to ours next time. (もしあなたが次回私たちの家に来てくれるなら、私たちは今回あなたの家へ行きます。) これは語の意味範疇が日英で異なる例である。通常、*come* は「来る」と訳されるものの、実際には、話し手と聞き手の両方、もしくは、話し手が聞き手のいずれかの場所に近づくことを意味するために、日本語の「来る」に対応しない場合がある (e.g., 高野, 2011)。ここでは初出の *come* は「来る」、2 回目の *come* は「行く」と訳出し、日本語文における意味を重視した。

(4) The women whom we heard at the conference today were excellent speakers. (私

たちが今日の会議で話を聞いた女性たちは素晴らしい演説者でした。) これも語の意味範疇が日英で異なる例である。*women* は「女性たち」の意だが、ここで *heard* の目的語の *women* は「女性たちがした話」を指す。これは、英語と日本語の人称の活性化領域の差異という観点から説明できる。例えば、「ピアノを聴く」／*hear the piano* のように楽器の音を言語化しない捉え方において、「ピアノ」／*the piano* という「全体」は「ピアノの音」という「部分」を意味する。このとき「部分」は活性化領域と呼ばれる (Langacker, 2002)。吉村 (2009) の指摘するように、例えば、*Listen to me.* の *me* や *I don't hear you well.* の *you* は「私」や「あなた」ではなく、「私の言うこと」や「あなたの言うこと」である。つまり、英語テキストでは *me* の活性化領域に「私の言うこと」が含まれるが、日本語テキストでは含まれないので、「私の言うこと」と訳出する必要が生じる。(4) の例文でも、「私たちが聞いた女性たち」は不自然であり、「私たちが話を聞いた女性たち」と訳出した。

(5) *There is the man whom he suspected of having an affair with his wife.* (彼が自分の妻と浮気したと疑った男がいます。) これもまた語レベルで等価が実現しない例である。*he* を「彼」、*his* を「彼の」と逐語的に訳すると「彼が彼の妻と浮気したと疑った男がいます。」となる。しかし、これを文頭から読むと、「彼が彼の妻と浮気」になり、不適格である。ここでは、所有格 *his* を「自分の」と訳出することによって文意が通じる。

以上、学習支援目的を持つ SCoRE 英語例文の訳出について、いくつかの具体例を見てきた。動的等価が優先される多くの小説等の翻訳とは異なり、SCoRE 対訳作成では、形式的等価を重視し、文法項目や構文を対応させるよう逐語的に訳出することと同時に、学習者の理解の負担にならないような分かりやすい日本語訳の作成を目指すことも基本方針とした。しかし、実際に訳出してみると、これら二つの基本方針を両立することが難しい例文も少なくなかった。

4. 例文変更および削除の事例

学習支援を目的とする SCoRE は、文法項目の習得・定着に主眼を置いて設計されており、前述の通り、英語教育の実践経験を有する英語母語話者が英語例文の作成を担当した。しかし、以下に示すように、日本語訳出の過程において、英語例文変更を要請したり、例文を除外したりせざるを得ない事例が生じた。その背景には、学校教育で提示される文法項目と、英語例文作成者が想定する文法項

目についての理解の差があったと考えられる。また、口語的表現のように母語話者が日常的に使用するものの、学校教育の英語においては優先的に扱われていない表現を含む例文もあった。そのような例文についても、変更もしくは除外とした。

学校教育における文法項目と英語母語話者の理解する文法項目との差異の例については、第一に、仮定法がある。SCoRE 英語例文として想定していた仮定法の例文は、現実とは異なる事柄や願望を述べるときに使用される、*if* + 過去形／過去完了形の動詞で表わす仮定法過去／仮定法過去完了や、*I wish* + 仮定法過去／仮定法過去完了である。しかし、英語母語話者が作成した例文には、この仮定法の *if* と直説法の *if* (「～かどうか」を意味する従属接続詞の *if*) が混在していた。例えば、*She asked him if he wanted to get married.* や *I didn't know if he wanted to come with us or not.* や *I was wondering if he tried to contact you.* などである。これらの例文については、英語例文作成者に変更を依頼し、新たに別の例文を作成してもらった。この仮定法の例から判断すると、英語母語話者は *if* を使用した文であれば仮定法を使用した文であると概括的かつ感覚的に捉えており、学校文法の仮定法が指す範囲よりも広い範囲で使っているのではないかということが推測された。

第二に、*to* 不定詞の形容詞的用法についても、学校文法の枠組みに当てはまらない例文が作成された。想定していた例文は、*I have a lot of things to do.* のように *to do* が *things* という名詞や名詞句の後に続く「～するための」の意を持つ例文であったが、例えば、*I don't want things to change.* という例文が作成された。これは *want O to do* とも解釈でき、*to* 不定詞の形容詞的用法ではない可能性もあるため、書き換えを要請した。また、*There are a few things we need to discuss.* という例文も作成されたが、これは *a few things* のあとに関係代名詞が省略されているとも考えることができ、*to* 不定詞の形容詞的用法とは異なる可能性があるため、修正を依頼した。SCoRE 例文は文法項目ごとに提示されるため、不定詞の形容詞的用法や副詞的用法を区別し、英語例文作成を依頼したわけだが、英語母語話者は、文法を意識してテキストを産出するわけではなく、足りない情報を補う感覚で *to* 不定詞を使用しているのではないかということが考えられた。

第三に、指示詞の後方照応など、SCoRE の対象学習者にとって学習する優先度が低いであろうと判断されたときにも英語例文の変更あるいは削除が行われた。*I know he loves me, but I wish my cat would stop bringing home dead birds and mice.* は人称代名詞 *he* が、指示対象の *my cat* の前に置かれる、指示詞の後方照応

を含む例文である。人称代名詞の後方照応は一般的とはいえないが、英文として不自然ではない。しかし、文法パターンの習得に効率的であるためには、対象学習者に理解しやすい英文を提示すべきと考え、ここでは、*he* と *my cat* の位置を交換し、より一般的な前方照応に変更した。

第四に、口語表現についても、学校教育で学習する優先度は高くないと判断し、変更もしくは SCoRE から除外した例文がある。*Let's go get something to eat.* に含まれる *go get* は口語では一般的な表現であるが、学習者には馴染みが薄いと思われる。そのため、*go get* を *go and get* とし、*Let's go and get something to eat.* へと修正した。また、現在完了形の例文として *I've only got a minute.* が作成された。しかし、この文では *have got* は *have* と同義の口語表現である。同じく現在完了形の文として *We've made it!* も作成されたが、イディオムで「やった!」という固定的な意味も持つ。これらは SCoRE から除外された。

5. まとめ

SCoRE には、日本の教育現場に効果的な DDL を導入することを念頭に置いて、対象学習者にとって適切な難易度の英語例文とその日本語訳が集積されている。対象学習者の不得意とする文法項目に対応した高頻出語のキーワードが選定され、可能な限りコンテキストに依存しない英語例文が作成された。⁵ 一方、英語例文に付与した対訳の作成においても、教育支援ということを主眼に置き、英語例文と日本語対訳の間での形式的等価の実現と、学習者に理解しやすい日本語訳の提示を基本方針としてできる限り違和感のない対訳作成を試みた。英語例文によっては、この二つの基本方針の両立は困難なものがあり、そのような事例のいくつかを本稿で取り上げて検討した。

現在、暫定版として公開されている SCoRE は、実際の DDL 授業実践において英語例文を提示するという利用方法に加えて、教師の教材作成の補助ツールとして既に使用されている（西垣他，2014）。SCoRE の英語例文と日本語対訳は著作権フリーであり、テキストファイルとして一括ダウンロードが可能である。取得した英語例文や日本語対訳の変更も容認されているので、より学習者に利する英語例文の提示が可能である。注意すべき点としては、SCoRE は英語例文と日本語対訳が平行に提示されているが、英語例文から日本語訳を作成しており、日本語から英語例文を作成していない。そのため、例えば、英作文の課題作成に利用する場合は、日本語文にある程度の加筆修正を加えた方がよい場合もあ

るかもしれない。

現在、SCoRE は集積する文法項目や英語例文の数を増やしており、今後更なる拡充が見込まれ、より多様な授業実践の支援が可能になると期待される。また、対訳を作成する上で形式的等価の実現に制限があった英語例文は、今後、日英対照の認知言語学的な差異を提示する例としても利用価値を見出すことができるだろうと考えられる。

謝 辞

本稿の内容は、英語コーパス学会第40回大会（2014年10月5日、於：熊本学園大学）における研究発表に基づく。研究発表をご聴講いただいた方々から有益なご意見を、また、編集委員長および本稿査読委員の方々から貴重なご指摘を数多く賜った。ここに記して感謝の意を表する。本研究の一部は、平成25年度-28年度科学研究費補助金基盤研究（B）（25284108）の助成を受けて実施した。

注

1. SCoRE や他の検索ツール等を統合して「DDL オープンプラットフォーム」をウェブ上で開設する際に SCoRE という名称を改称する予定である。
2. TOEIC 公式ページの換算表の情報を参照した。
http://www.ets.org/s/toEIC/pdf/toEIC_cef_mapping_flyer.pdf
3. 本稿では、英語の *translate/translation* に対応する「訳の作成」と「翻訳」を同義として考える。
4. Vladimir Vladimirovich Nabokov により英訳された Alexander Pushkin の *Eugene Onegin* (1964) や、伊丹十三により翻訳された William Saroyan の『パパ・ユークレイジー』(1988) は形式的等価を重視した訳といえよう。これらの翻訳は論争を呼び、実験的な試みとされることが多い。
5. 教育的配慮と例文の *authenticity* についての議論は、Chujo et al. (2015) の3.5節 p. 120 の *pedagogical criteria* (*appropriateness and usability*) を参照されたい。

参考文献

- Allan, R. (2009) "Can a Graded Reader Corpus Provide 'Authentic' Input?" *ELT Journal* 63, 1: 23-32.
- Baker, M. (2011) *In Other Words: A Coursebook on Translation*. Oxford: Routledge.
- Chujo, K., K. Oghigian and S. Akasegawa (2015) "A Corpus and Grammatical Browsing System for Remedial EFL Learners." In Leńko-Szymańska, A. and A. Boulton (eds.), *Multiple Affordances of Language Corpora for Data-driven Learning*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 109-128.
- Chujo, K., M. Utiyama and C. Nishigaki (2007) "Towards Building a Usable Corpus Collection for

- the ELT Classroom.” In Hidalgo, E., L. Quereda and J. Santana (eds.), *Corpora in the Foreign Language Classroom*. Amsterdam: Rodopi, pp. 47-69.
- Cobb, T. and A. Boulton (2015) “Classroom Applications of Corpus Analysis.” In Biber, D. and R. Reppen (eds.), *The Cambridge Handbook of Corpus Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 478-497.
- Johns, T. (1991) “Should You Be Persuaded: Two Samples of Data-driven Learning Materials.” *ELR Journal* 4: 1-16.
- Kenny, D. (2009) “Equivalence.” In Baker, M. and G. Salddanha (eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (2nd ed.). Oxford: Routledge, pp. 96-99.
- Langacker, R. W. (2002) *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar* (2nd ed.). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Munday, J. (2008) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. Oxford: Routledge.
(鳥飼玖美子 (監訳) (2009) 『翻訳学入門』東京: みすず書房)
- Nida, E. A. (1964) *Toward a Science of Translating: with Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- Panou, D. (2013) “Equivalence in Translation Theories: A Critical Evaluation.” *Theory and Practice in Language Studies* 3, 1: 1-6.
- 高野恵美子 (2011) 「日英移動動詞 COME と GO の対照研究: 認知言語学の視点から」『學苑』第846号: 28-39.
- 中條清美・西垣知佳子・山保太力・天野幸太郎 (2011) 「英語初級者向けコーパスデータとしての教科書テキストの適性に関する研究」『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』第44巻: 13-23.
- 中條清美・西垣知佳子・山保太力・落合太一 (2012) 「米国 Reading 教科書と英語 Graded Readers の英語初級者向けコーパスデータとしての適性に関する研究」『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』第45巻: 29-42.
- 中條清美・横田賢司・長谷川修治・西垣知佳子 (2012) 「リメディアル学習者の英語習熟度と英語文法熟達度調査」『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』第45巻: 43-54.
- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・中條清美 (2014) 「中学校におけるコーパスを利用したデータ駆動型英語学習の実践: ペーパー版 DDL からタブレット端末 DDL まで」英語コーパス学会第40回大会, 熊本学園大学.
- 古野ゆり (2002) 「日本の翻訳: 変化の表れた1970年代」『通訳研究』第28巻第2号: 114-122.
- 吉村公宏 (2009) 「認知言語学からみた語学教育: 『捉え方』の視点から」『言語』第38巻第10号: 18-23.

(若松 弘子 筑波大学大学院 E-mail: h.wakamatsu@gmail.com)
(石井 卓巳 筑波大学大学院 E-mail: s1330049@u.tsukuba.ac.jp)
(中條 清美 日本大学 E-mail: chuujou.kiyomi@nihon-u.ac.jp)